

私の出会った人たち

(1)

関谷啓子

「山脈」というサークルがある。戦後雨後の筈のように立ち上がったサークル運動で現在でも続いている唯一のサークルではないだろうか。わたしは7回目の「加波山集会」が初めての参加で24歳だった。あれからもう45年も経ってしまった。

隔年に周り持ちで日本のどこかで「山脈全国集会」が開かれる。

会員もその時集会に参加した人、規則も何もないとても緩い集まりである。決まりはないのだが創設メンバーである白鳥邦夫はいつも「君は君の足元を掘れ。僕は僕の足元を掘る」と言い続け「継続は力だ。自分の日々の生活を記録する事が歴史になる」とも言った。柔らかくしなやかな話しぶりの底にブレない視点があり、信頼に足る大人だと思った。夏になると「集会時期と会場」が私の夏休暇のベースになっていた。

その仲間の Y さんが「地面の底が抜けたんです」というハンセン病患者の手記を一人芝居にするにあたり言った言葉が忘れられない。

「言葉を聞かずに響きを聴け。言葉の意味を無理に捉えようとしなくても良いからとにかく聴け」と言ったのだ。伝えたいという強い思いがあればそれだけで良いのだとも言った。

公務員として30数年を過ごしたが、仕事の殆どは「聞くこと」に終始していたと思う。若い頃は「まず聞く」ということに耐えられず「でも…」とか「ちょっと待って」などと口を挟む事ばかりだった。

40代後半から50代前半を「婦人相談所」という機関で働いた。夫や恋人からの暴力、サラ金の執拗な取立てなどから逃れて、着の身着のまま駆け込んでくる女性たち、気がつくところにも行き場がないと深夜ブザーを押す女性たちなど実に様々な事情を抱えた女性が最後に来てくれるのが「婦人相談所」であったと思う。

泣いたり笑ったり悔しさに歯ぎしりしたりしながら、それでも私はそこで出会った人達に多くを教えられ育ててもらった。

Sさんは私が相談所で初めて担当した人である。近畿管内の女子刑務所を出てきたばかりだという女性を身近にするのは初めてで「あなたが担当です」と言われて足がすくんだのを今でも覚えている。眼光鋭く骨太な女性であった。そして開口一番「もう一度、刑務所に戻してください。そして一生あそこに居られるようにしてください」と言った。聞くと何回も刑務所を出入りしている間に母はそれを苦に病死。他の家族は関わりあいを恐れて転居し、行方が分からないとの事。

とにかく1時間ほどの初回面接で聞き出せた事はほんの僅かでどうしていけばいいのか見当もつかなかった。

聞けば収監された内容は食パン1袋、石鹼1個の万引きである。度重なる回数ゆえに実刑になったのだろうと推測した。打つべきもち札のなかった私はとにかく一緒にいる事から始めた。

何かを聞きだすというのではなく、草むしりしたり散歩したり内職をしたり、、、を続けた。

ある日「どうしていつも一緒にいるのか。仕事はしなくて良いのか」

と聞かれた。「一緒にいるのに理由はない。一緒にいたいからいるので、今はこれが仕事」と答えると信じられないという表情を見せたが困ったように「もう一度刑務所に戻れないか」と聞く。「戻れない。だからここで暮らすことから始めよう。もし一人で暮らして刑務所に入るようなことになったら、出てからまた相談所にいらっしゃい。でも一日でも長くこっちの世界で暮らしてみようか。そのための手伝いをしたい」と言うと黙り込んだ。

半年程相談所にて、障害者手帳や生活保護など福祉の援助を受けながらの出発ではあったが、良い仕事先と仲間たち、それに情のあつい大家さんに出会い元気に独り暮らしを始めた。

私はといえば、その後、仕事で行き詰まるたびにSさんのアパートを訪ね、近くの河原を散歩したり、四方山話をしながら彼女に元気をもらった。担当ケースに手ひどく裏切られて落ち込んでも彼女の事を思い出すと、もう一度信じてみようと思えた。彼女が元気で生き生きと働いてくれている事が私を励ました。

かなりハードなケースばかりの相談所での8年間をずっと支えてくれたのはSさんだ。彼女のその後にも様々なことがあって今日を迎えているが、後日談はまた改めて。

M市郊外の路上でうずくまっているのを保護したが、一言も喋らないのでなんとかしてほしい・・・と警察から連れてこられた若い女性がいた。聞こえるし、こちらの話は理解しているようだが全く声を発しない。質問には頷くか首を振るかで意思を伝える。

一週間一緒に暮らしていると、障害ではなく彼女自身の強い意思で声を出さないのだと判ってきたが、それ以上どうしようもない。

仕方がないので代わりにこちらが喋った。来る日も来る日も朝から晩まで一方的に話し続けた。嬉しかった事、悔しかった事、今読んでいる本の事、好きな唄い手の事、通勤の

途中でいつも見かける老人と犬の事などなど。

「手仕事は好き?」と尋ねると頷くので二人で小さな刺繍や指ぬきを作ったり編み物をしながら私はまるで消し忘れたラジオのように語りかけ続けた。

1ヶ月後、彼女の僅かな表情の変化を便りになんとか家族を捜し出し迎えに来てもらったが、それでも彼女は声を出さず一緒に帰るのを嫌がった。「鳥が鳴くような高い声なんですがね。聞かれませんか」と呟く母親に、今度は逆に「もう少し相談所に居させてください。彼女が自分から帰る気持ちになるまで、」と頼んで帰ってもらった。

彼女は中国残留孤児だった母親が日本に帰国する時、家族揃って中国からやって来た娘さんだった。その時10歳だったという。家族中で一番日本語が上手で通訳になるのが夢だったという。工場で働きながらB大学で学んでいた。北海道の小さな町に住む両親は、家を離れて働いていた娘が1ヶ月以上も部屋を空けていた事を知るはずもなかった。

身元がわかって、彼女は相変わらず声を出さなかったが、生まれ故郷や北海道の話をするとうるさくが多くなった。更に1ヶ月経ったある日、だるまストーブの上に置いて焼けたところからフーフー言いながら剥いで食べるというジャガイモの話。極寒の朝光り輝くダイヤモンドダストの話。

「一度で良いからみてみたいなあ。輝く霧なんて凄いな」とため息をついた時、突然「見においでよ。一緒に見よう」と鳥のような声が聞こえた。

あっけにとられる私にかまわず堰を切ったように故郷の話をする彼女の声を聴いた。黙り続けた時間の長さを思いながら聴いた。何が彼女の封印を解いたのだろうと思いながら聴いた。話してくれることを心底ありがたいと思いながら聴いた。

私に「聴く」ということを教えてくれた葛忠雲さん あなたに感謝しています。